

留学先大学：Ca' Foscari University of Venice
 留学先での所属学部・研究科：Humanities
 留学先での在籍身分：交換留学生
 留学期間：2012年9月～2013年6月
 神戸大学での所属学部・研究科：国際文化学部
 学年（出発時）：3年
 本報告書記入日：2012年11月12日

出発前

どのように情報を集めましたか。参考になる本やホームページがあれば、記入してください。

大学HP

『AMO ITALIA』 http://www.amoitalia.com/italia/about_italy.html
 『イタリア留学のお手伝いAiuto』 <http://aiutoitalia.com/>

住居について

- ・住居のタイプ：大学寮 アパート ホストファミリー その他（具体的に）_____
- 住居（寮，アパート）の名前：Junghans
- ・部屋の種類：一人部屋 二人部屋 その他（具体的に）_____
- ・ルームメイト：現地学生 留学生（出身国：_____） その他（具体的に）_____
- ・どのように探しましたか。：大学の斡旋 自分で探した その他（具体的に）_____
- ・大学までの通学時間・手段：30分，徒歩、ヴァポレット(水上バス)
- ・住居の周りの環境はどうか。：

大学寮があるジュデッカ島は本島のすぐ南にある島です。観光客が少なく静かで落ち着いています。近くにコープや水上バスの停留所、郵便局や銀行もあります。大学のある本島へは、ヴァポレットに乗って運河を渡る必要があります。

- ・毎日の食事はどうしていますか。：

朝夜は寮の共同キッチンで軽く調理して食べ、昼は大学の食堂で食べるか軽食を持参します。

- ・住居は渡航前に、または渡航後すぐにみつけられましたか。トラブルはありませんでしたか。：

渡航前に大学側が紹介してくれました。希望通りシングルルームに入ることができました。

大学の授業について

1. 履修登録について

- ・履修登録の時期：出発前 到着後
- ・履修登録の方法：On-line International Office等の仲介 その他（具体的に）_____
- ・登録時に留学生として優先・配慮されることはありましたか。：無し 有り
- ・優先・配慮があった場合、具体的に教えてください。

渡航後にInternational Relational Officeで担当者の方が提出済みの希望履修科目表を見ながら、シラバスや開講時期の確認をしてくれました。履修登録に変更があれば再度期間内に用紙を提出します。

- ・希望通りの授業が履修できましたか。：はい いいえ
- ・希望通りの授業が履修できなかった場合、その理由を教えてください。

2. 現在までに、履修している授業について記入してください。

No.	コース名	教授名	時間数 /週	留学先 での単 位数	履修し ている 学生数	予習, 復習, テスト等についてアドバイスも 含めて教えてください。
1	Italian for Foreigners	Francesca	90分 ×4	6	約20	毎日少しの宿題が出ます。中間テスト 後、週2コマに減ります。
2	Architectural and Urban Heritage	Guido Zucconi	90分 ×2	6	約20	参考文献を使って予習、復習、数回の課 外授業あり、最終レポート
3	Globalization and Cultural Heritage	Bruno Bernardi	90分 ×2	6	約20	参考文献を使って予習、復習、最終レ ポート
4						
5						
6						
7						
8						
9						
10						

3. 授業（カリキュラム等）について クラスのサイズ、成績評価、現地学生の取り組み等

クラスは約20人までの少人数で行われ、生徒の意見を取り入れながら進めてくれます。提携大学から派遣された教授が行う授業もあります。成績評価は出席状況と課題、期末レポートまたはテストを合わせて評価されます。
イタリア語の授業（VIU）は、ヴェネツィア内の語学学校から派遣された語学講師による授業で非常に分かりやすいです。

一週間のスケジュール（授業時間、課外活動等、毎日の生活を記入してください。）

	月	火	水	木	金	土	日
8:00	起床	起床	起床	起床			
9:00							
10:00							
11:00	Italian for Foreigner s	Italian for Foreigner s	Italian for Foreigner s	Italian for Foreigner s	VIUの 課外活動 に参加し たり、近 郊へ出か けたりし ていま す。		
12:00							
13:00	昼食	昼食	昼食	昼食			
14:00							
15:00	A&U Heritages	Globalizat ion & CH	A&U Heritages	Globalizat ion & CH			
16:00							
17:00							
18:00	帰宅	帰宅	帰宅	帰宅			
19:00							
20:00	自習	自習	自習	自習			
21:00							
22:00							

現在までの感想 自由に記入してください。（800字〜）

アドリア海の最深部にあり、『水の都』として知られるヴェネツィアは、120以上の島々と170以上の運河からなる街です。島の人口わずか6千人に対して、その数倍規模の観光客が毎日押し寄せる世界有数の大観光都市です。私はここで、溢れ返った観光客の間を縫って船着き場へ向かい、運河と海を渡って学校へ向かう日々を送っています。

今年度、神戸大学から交換留学生第一号としてカ・フォスカリに留学しました。参考にできる資料が非常に限られていた中で、渡航するぎりぎりまで、大学のHPやヴェネツィア在住の方のブログなどから闇雲に情報を集め続け、遠い国の特異な街で、自分が暮らしているイメージを必死で膨らませていました。

時は早いもので、八月末に日本を出発してから二カ月半が経ちました。振り返る間もなく過ぎて行った最初の二ヶ月間半ですが、私が日々感じていること、インターネットで集めた情報ではなく自分の体験から気付いたことを、この場をお借りして簡単にですがお伝えできたらと思います。

私はイタリアに来てから、自分の中で大きな心境の変化を感じています。それは日本への関心の高まりです。留学前は、高校生のころから漠然と憧れと興味を抱いていたイタリアで暮らしてみたい、多様な文化に触れてみたい、という想いで留学を目指していました。もちろん毎日が異文化体験であり、イタリアの暮らしを少しずつ理解してきています。しかしそれは『外』を知ることにはすぎません。実際に暮らしてみて、自分の中の最も大きな心境の変化は『内』への関心、つまり日本への関心の高まりです。外国で、とりわけ人種の異なる異国で暮らしていると、否応なく自分が日本人であることを自覚させられ続けます。それだけでなく、日本での暮らしとのギャップを感じ続けることで、自然と日本の姿を客観視する癖がついてくるのです。

とりわけ強く感じるギャップが、人びとの毎日の過ごし方、いわば姿勢の違いです。こちらの人々は背筋をぴんと伸ばし、胸を張って歩いています。すれ違いざまに目が合えば軽く微笑んで挨拶を交わし、晴れやかな表情で去っていく姿は、見ているだけでも実にすがすがしい光景です。彼らは、仕事と私生活のメリハリがあり、一日に何度も休むことを否定しません。見知らぬ人だろうと、同じ場所に居合わせた人なら誰彼問わずいつでもわいわい語り合っています。それで仕事や作業が中断されることも日常茶飯事です。そんな彼らの生き方は、日本人の私からすればじれったく感じてしまうこともあるのですが、毎日人間らしく過ごし、歳を重ねることを楽しんでいるように見える彼らの姿勢を、少しでいいから日本人も見習えないものかと強く感じます。

もちろん、日本が築き上げた利便性や効率社会は誇るべきものです。公共交通機関が時間どおりに運行され、コンビニや二四時間営業の店が豊富にあり、役所や窓口には常に人がいてスムーズかつ正確に事務処理が行われる日本社会が恋しくなったりもします。しかし、口を開かなくても欲しいものが手に入る日本では、人との交流も稀薄になってしまっている気がします。イタリアは今でも、お店の方と直接交渉しないとものが手に入らない商店形式のお店がほとんどです。ひとつの手続きを進めるためにも、何人もの人の手を借りなければなりません。それをどうとらえるかは人それぞれだと思います。しかし、日本人は道を尋ねれば誰でも親切に教えてくれる温かい人ばかりなのに、街中で挨拶を交わすことはおろか、目さえ合わせずに歩いている人がほとんどです。これは非常にもったいない生き方だと思います。

安全で平和で、食べ物も豊富にある裕福な日本、情報とモノがあふれ、便利で快適な日本で居心地良く暮らしていただけないこと、日本では当たり前常識、日本の良い点も改善すべき点も、客観的に認識できるようになることも、留学の大きなメリットの一つだと感じます。言語の壁や異文化の壁を超えることだけが留学ではありません。私自身、『外』に出て『外』を知ることが目的だった当初に比べ、『外』を知って初めて評価可能になる『内』とそのギャップを知ることができただけでも、留学する価値があったと感じます。日本をもっと幸せな社会にしていけるためには何が必要なかを考えるための手段ときっかけを得ることができるこの一年間という限られた時間を無駄にしないよう、今後も様々なところに目を向けていこうと思います。